

山岡鉄舟 XV

禪と共に歩んだ先人

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

牧ノ原台地の開拓

静岡藩における最大の問題は、無禄移住者として押し寄せた大量の旧幕臣の処遇でした。そこで牧ノ原台地を開拓し、茶の栽培を奨励する事となりました。鉄舟は中心となってその政策を進めていったのです。用地を徳川家からもらい受け、旧幕の精鋭隊士を説得して帰農させたのでした。多くの苦勞を重ねながらも、な

んとか事業は軌道にのり、静岡は今日まで続くお茶の一大生産地となりました。静岡の成功はモデルケースとして全国に広まり、その後のこの国の農業政策に大きな影響を与えたのでした。

明治帝の侍従となる

明治4年(1871) 廃藩置県が新政府より発令されました。それに伴い権令(現代の知事にあたる)と参事(副知事)が政府より各県へ派遣されました。新政府との交渉役を静岡で担ってきた鉄舟にも呼びかけがかり、先ず茨城県へ参事として派遣されました。1ヶ月半つとめた後、今度は伊万里県(現在の佐賀県)へ権令として派遣されました。ここではたった1カ月の勤務で職を辞してしまします。廃藩置県という大変革に対する抵抗勢力の暴発を新政府は危惧しており、それに対する牽制の為と、この制度を軌道にのせる為に鉄舟という人間を見込んでの機用だったのでしよう。

静岡に帰って、再び静岡県政に勤しむ

鉄舟でしたが、そのまま放っておかれるはずも無く、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允らのたつての要望で明治天皇の侍従番長となります。固辞していた鉄舟でしたが、断りきれず10年という期限を設けて出仕を決断しました。静岡を離れ、東京へ戻る事となった訳ですが、鉄舟を慕う多くの人々が別れを惜しみ、鉄舟宅での別れの宴は幾日にも及んだということです。

生れ故郷である東京へ戻った鉄舟は、水を得た魚のごとく、その才を発揮していききました。この項の冒頭で鉄舟は剣道、禪、書の達人で全ての事で超一流であったと記しましたが、いよいよそれが完成の域へと達していく事となるのです。この時鉄舟は37歳でした。

以下次号 (一峰 義紹)

